

音楽科における資質・能力の育成

本年度の附属小学校・附属中学校音楽科では、表現領域から「歌唱」の分野を中心に授業研究を進めてきた。歌唱に必要なとされる声楽の資質・能力としては、楽器としての「声（発声）」と、演奏者としての「表現力」の二つに分けて考える必要がある。歌唱における資質・能力についてまとめると、下表の通りである。

歌唱の要素	資 質	能 力
声（発声）	楽器としての発声器官	発声に必要な筋力・柔軟性
表現力	音楽を感じる力	曲に合わせて発声を工夫する力

資質・能力とも、学習初期段階においては多少の個人差が生じるが、訓練や経験の積み重ねにより、よい方向へと導き、向上させることができるものである。「歌唱」分野における資質・能力向上の具体的事例を以下にまとめる。

① 楽器としての発声器官

発声器官は、声帯や骨格などの違いにより、楽器としての特性に違いが生じるのであるが、成長過程においても形状が変化し、それに応じて特性も変化する。日常的に声は発せられるため、成長による変化に自然に対応しているのである。楽器として機能させる際には、安定した声帯振動と共鳴腔の十分な空間保持が重要となり、発声時の器官の働きに工夫が必要である。声帯を持続的に振動させる発声練習や共鳴空間の保持に働きかける表情筋や胸郭周辺の柔軟運動が、楽器としての質の向上に繋がる。

② 音楽を感じる力

学習する楽曲の音の質感や音楽を形づくっている様々な要素のかかわり合いを感じ取ることによって、表現に生かすことができる。日常の学びの中で、様々な音楽に触れ、感受と表現との往還を重ねることで、曲想を感じ取り深く味わえるよう、導くことができる。

③ 発声に必要な筋力・柔軟性

声は筋肉の働きにより発せられるため、必要な筋肉の強化により、より安定した発声を可能にする。また、表現に必要な声の変化には、筋肉の働きの柔軟性が必要となる。歌唱表現に必要な発声の追求と練習の積み重ねにより、筋力および柔軟性が身につく。

④ 曲に合わせて発声を工夫する力

楽曲に対するイメージや思いを、①や③で会得した種々の発声と細やかに結びつける指導を行うことで、表現に必要な声の選択と工夫へと発展させることができる。

音楽は、感覚的に捉え、感じ、表現する芸術であるため、学校教育においては、演奏技術を習得することに重点をおくことよりも、音楽に対する感性を豊かにし、表現に生かすことのできる力として、演奏能力を高めることが望ましい。

音楽に対する興味・関心を高め、音楽の美しさを感じ取り、表現活動へと生かす指導を、子どもの発達段階に合わせて展開するよう授業を構想し実践する試みは、幼小中一貫教育という考えからも重要であると考えられる。

(共同研究者：芸術表現教育講座(声楽)、佐々木 直樹)